

日本的感性、再び



日本列島を彩る四季の中で、最も気持ちの良いこの季節。日本人は五月晴れの天空の下で、大きく背伸びをしてみたくなる感覚に駆られますね。外国国籍の方々には申し訳ありませんが、今月は以前にも本欄

で少し触れたことのある日本的感性について、改めて記してみたいと思います。

日本人の感性をくすぐる代表的な句に、松尾芭蕉の「古池や、蛙飛び込む水の音」があります。解説書によれば、古池と蛙は別々の風景で、現実の光景ではなく頭に想い描いた心象風景なのだそうです。音の無い静けさの中に、古池がひっそりと佇んでいる。その存在は雄大な時の流れの中にどっしりと構えており、その威厳に圧倒されそうです。一方で全く別の風景として、小さなカエルが水の中に飛び込みます。その音はポチャンと小さく、他の音があつたらかき消されてしまう程のいのちの音色です。そこで芭蕉はこの二つの心象を合体させました。威厳のある古池の圧倒的な存在感と小さく儂いいのちの対比、それに呼応して永遠なる静寂さとその中でやっと聞き取ることが出来る小さな水の音の対比。これらの対比を通して、無限なる時空間に包まれたいのちについて詠った句と言われます。

俳句といえばもうひとり、有名な俳人に正岡子規が挙げられます。代表作に「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」。分かりやすいですね。柿喰ってたらゴ〜〜ン。現実的に見れば、ちっとも味わいを感じません。私の勝手な解釈で申し上げれば、法隆寺の鐘の音は千三百年の時を経て、同じ音色で現代の空にも響き渡ります。遠く奈良の都を彷彿とさせる音色に包まれて、一人の旅人が秋の味覚を楽しんでいる光景です。この旅人に宿るいのちは、千三百年という時の流れの中で受け継がれてきた小さな命。この時空間の広がりや命のはかなさの対比を、鐘の音、旅人、いのちを育む食、そしてはかなさの象徴である果物を絡めて、秋という枯れ行く季節の中のひとつの情景に凝縮させたのだと思います。

子規は心象風景を詠う芭蕉の作風とは一線を画し、目の前の事実や現象を題材にする写実主義を徹底しました。「柿くへば…」の句に関するかぎり、芭蕉が思い浮かべた心象風景を現実の世界の中に捉えた、珠玉の作品に完成されています。このように、子規は芭蕉とは対照的な作風でありながら、

結果的には同じ情感の句が出来上がったのは、偶然というよりもこれが日本人の心の深奥に宿る感性だからだと私は考えています。両者はいずれも時空間に裏付けられた荘厳な雰囲気の中に、それに包まれている小さな命を詠っているのです。これがまさに、日本人の心を和ませしてくれる雰囲気を醸し出してくれるのでしょう。だからこそ、小中学生でも知っているくらい有名な二句として、世代を越えて伝えられてきたように思えるのです。

以前の本欄では日本的感性とは、大きな存在に包まれたいという感覚が根底にあるのではないかと述べました。その代表的な慣習として挙げたのが、春のお花見です。ときどき外国の方々から、日本人はお花見と言いながら花を見ていない、というご指摘を受けることがありますね。そう、そのとおり。たとえば桜を上から見下ろしても、私たちの心は安らぎを覚えません。桜は見る対象ではなく、下に入って包まれるもの、さわやかな春の風と共に私たちを包み込んでくれるから、日本人の心を満足させてくれるのです。私はこの包まれる感覚は、露天風呂にも通じると考えています。日本人にとっての露天風呂は、単なる青空天井の浴槽を指すわけではありません。草木があり、岩があり、風の通る空間があります。そして、静寂さを強調するかのように、そよ風になびく葉のささやき、月明かりに浮かぶ水のきらめき、絶え間なく流れ込む湯のひびき。このような雰囲気の中で、私たちは湯に浸かるのです。自然と一体になった感覚、自然に包容された安心感。それが日本的感性の真髄です。昨今は、外国暮らしの経験のある方が、珍しくない時代になりました。しかし、生活スタイルは変わっても、春のお花見と露天風呂が愛され続けるかぎり、日本的感性が廃れることはあり得ないと私は考えています。

新年度がスタートして、また新たに新入社員の諸君が仲間に加わりました。若い人たちはいつの時代においても、「今の若い者は…」などと言われてしまいます。しかし時空間や自然環境などの一体感から来る安堵感と歓びが、これまでと変わりなく継承されていくかぎり、若人の日本的感性も大丈夫。出迎える私たちは桜のような温もりを以て彼らを包み込んであげるのが、彼らの才能を開花させる第一歩であるように思います。